水の事故防止

夏に集中——

小さな〝いのち〟を守ろう

太陽の光の中で思いっきり遊びまわれる夏は、〝チビッ子たち〟にとって最も楽しい季節。

海や山や川に、元気なはしゃぎ声が響きますが、一方この時期は、いろいろな事故の多いシーズンでもあります。

とりわけ、水による事故で、とうとい〝いのち〟が失われたというニュースにふれると胸が痛くなります。

昭和六十年中の全水死者の約三割が中学生以下の子供たちで、その事故のほとんどが夏休みに集中しています。

保護者がいないと危険率が高まる

子供の水の犠牲者を統計からみてみますと、次のような特徴があります。

●場所別では河川（百一人）が最も多く、ついで海（八十六人）用水堀（四十二人）、湖、沼、池（四十人）、そしてプール（二十八人）の順です。

●どんなときに命を落としているかというと、水泳中（百二十二人）がいちばん多く、ついで水遊び中（八十七人）、魚釣り（二十五人）、通行中（十六人）と報告されています。

●保護者が同行せずに、子供だけで行った場合に起きた悲劇が、やはり全体の約七割を占めています。

水の恐ろしさを教えよう

子供とりわけ三歳～五歳前後の幼児は〝水が命を奪う危険なもの〟であることを、体験的に知りません。

水しぶきをみれば、本能的に遊びごころがわいてきて、ヨチヨチ歩きで近づいていきます。

ちょっとお母さんが目を離したスキに、とりかえしのつかない事態になることが多いのです。

また、小学生でよく見られる事故に、プールの排水口に足を吸い込まれて水死するというケースがあります。

水遊びをするときは、次のような点に注意して、事故を防ぎましょう。

●近くに用水堀やため池などの危険な場所があるときは、管理者に申し入れて、サクやふたなどをしてもらいましょう。

●子供たちだけで水泳や水遊びに行かないように、ふだんから子供に言い聞かせましょう。

●出かけるときは、必ず大人が同行するようにしましょう。

●雨降りのあとは、川や用水が増水します。子供たちを近づけないように特に注意を。

●危険な水辺で遊んでいる子供を見かけたら、進んで「危ないからやめなさい」のひと声を。

＊　＊

夏休みが楽しい思い出の日記帳となるように、ぜひお子さんたちと〝水の恐ろしさ〟について話しあっていただきたいものです。

おじゃまします

中央保育園

七月二十四日、中央保育園の夕べの集いにおじゃましました。

盛り沢山の催しに、園児達は目を輝かせながら楽しい一時を過ごしていました。